方には、個人はその有する或る權利を任意に放棄することを得べく、他方には又、社會は全体として、公共の利益を保護すべき義務ありたるなりと。此の説を批評するものはいふ、是れ歴史的の説とは言ふべからず、蓋し國家は、微妙の發達をなしたるものにして、人工的の契約に其の基礎を置きしものにあらざればなりと。且つ夫れ此の説の主意を考ふるに、人は生れながら社會的關係を有するものにて、こは否定すべからざる事實なるに、社會に超然したる一種の權利を有せるものなりとの意を含む。又此の社會契約説の主意を推及する時は、自ら人民主權者説に達すべく、法律を以て一般的民意の發表と認めざるべからざるに至る。加之、主權にして若し民意に背戾すること頻繁なる以上は、之を破壞して、元來の契約を無効にすること、是れ人民の權利なりといふも、亦是れ此説自然の系論なり。而してこは、佛國革命時代の哲學なりき。之

に比すれば、獨逸の哲學は、一層深邃なりと謂はざるべからず。蓋し獨逸の哲學も、一般的民意を主權の基礎と認むる點は、佛國の哲學と異ならざれど、獨逸の哲學は此の基礎其れ自からが、人工的契約の上に立つものと認むることをせず、人類公共的意識の特色たる團結の上に立つものとするを以てなり。是れ主權自然の基礎にして、其主權者の法律に顯はるゝことは亦是れ自然的發表なり。教授グリーンは、此説に基きて、主權なるものは、個人的人格と社交的人格を保全するの必要といふことを基礎とすべきものなりとせり。即ちいふ、『個人は社會の附與したる權利を有するの要求即ち權利を有す。之に對して社會は、個人に或る權利を執行し得べき要求を有す。而して此の兩要求の基礎とする所は他なし、此等の權利は、人類が道德的存在者たる本務を盡すため、必要なりてふ事實是れなり。己れと他人の完全なる品性を發揮するの

事業を全うするため、必要なりてふ事實是れなり」と。

國政の領域　第三の問題は國政の領域如何に關するもの是れなり。之に就て、二個の相反對したる學說あり。一は古代のギリシヤ時代に起源するものにて國家の特權と權力とに重きを置き、他は、第十八世紀の精神を反射するものにて、個人の權力を主張し、以て國家の主權に反するものとなす。此の兩說は、一を社會的有機体說と呼べば、他は社會的分子說といふべし。さて此の個人主義說は、之を極端に推及する時は、遂に政府の本領を零點たらしむる無政府主義にとは到達すべし。之に反して、社會を過重するの極、個人を無視するの說は、必然の勢として社會主義に達すべく、社會は個人を監督すべきものにて、其の敎育につき、その職業撰擇につき、亦た其の收入につき、一切を吟味すべきものと主張するに至るなり。

政府の目的に關しては、注意すべき二個の傾向あり。一は唯物的傾向にして、政府唯一の本領は、秩序を維持し、罪惡を鎭壓するにありとなすものなり。第二は唯心的傾向にして、宗敎、科學、美術の如き人道の觀念をも打算するもの是れなり。借問す、所謂國家敎育といふが如きものは、果して實行し得べきものか。即ち國家はその法令により、敎育の保護者たらんとすべきものなるや。政府の干涉を厭ふと甚しき輩は、需要供給の法則、競爭の法則、發明の法則、摸擬の法則をして、自ら人類を救はしめよといふ。然るに又之に反對するものは、國家たるもの、公共の安寧を進捗するため、間接にも直接にも積極的方針を採らざるべからずといふ。例せば、強迫的敎育の如き、是れ間接に公共の安寧を禆補するものに過ぎざれども、尙ほ且つ公共の衛生と保安とのために、必要なりとは言ふなり。而して此の手段たる、思ふに完全の法律を設け、公

益の寄與者たる各個人の人格を保存するにより、庶幾くは之を達するを得べし。之に二點あるべし、一は過重の壓制を用ゐず、各個人の人格を運用せしめ、發達せしむること。二は干渉の極、自尊の念を減じ、獨立心を痲痺せしむるが如き弊を避くること是れなり。抑も干渉政府は、その民人をして、人格てふ要素を放棄せしむるの恐れあり。焉んぞ知らん、此の人格てふ觀念は、元氣旺盛なる人類を造り、而して國家に勢力と威名とを添ふるものなることを。さすれば、人格てふ觀念は、單に個人的のものにあらず、又社會的のものにして、社會主義といひ、個人主義といふも、決して相衝突するものにあらず、却て此の一概念の下に調和せらるべきものにてあるなり。

第十章 美感の問題(審美學)

審美學の領分内には、一般の哲學問題に關係あるもの尠からず。抑も審美學(エッセチックス)なる語は、バウムガーテンが一千七百五十年に發行したりし其著『エッセチカ』の中に之を用ゐたるを初めとす。而して此語はギリシャ語の『アイスサノマイ』αισθανομαι に出づ。即ち五官によりて知覺するの謂なり。されば此の語の根意よりする時は、『エッセチックス』とは即ち感性を研究するとの義なれども、さればとて一般の感性の義にはあらず、只自然界の美若しくは美術の美を感知するに伴ふて生ずる感性を研究するの義なり。此に至りて起り來るべき一疑問は、『美とは何ぞや』といふことなり。さて、此の美といふ語に、明了適切の定義を下すとは、一個の難事業なり。蓋し美の本質如何といふことに就ては、異

論紛々として定まらず。隨つて單純なる定義を下すといふ一事は、却て此の審美學の第一にして又最も重要なる問題たる觀あればなり。而して此の困難の點は何れにあるかといふに、美の意識なるものは極めて單純に、極めて平凡の經驗にて是より生せし概念を解剖せんとするも、殆んど能くすべからずといふ點にあり。若し夫れ認識的即ち知識的の分子より成れる概念は、之を感情的の分子より成れる概念に比すれば、勿論大いに的確に、大いに明了なる所ありといふべし。然るに模糊たる人類の感情を分解するに獨得の慧眼ある詩人ゲーテすら尙いふ、『美は是れ説明すべからざるものなり。是れ飄々忽々たる影にして、到底定義の捕捉を許さゞるものなり』と。

尙ほ又、美てふ概念に關して、我等の逢着すべき他の困難は、美てふもの丶本領如何といふを是れなり。抑も、美とは、一種の主觀的狀態なるや、

換言すれば、客觀が意識内に生せしむる單の快感なるや。或は又美とは主觀にも存在すると共に、客觀にも存在し、隨つて主觀内の快感は、之を外部の美の反影と認むべきや。若し後者なりとすれば美に關する最終の判斷は、之を客觀の性質が惹き起したる結果と認むべく、又觀察者の反動的感情の結果と認むべし。論じて玆に至れば、知識學上の根本問題が、審美學の域内にも侵入せるは、容易く認められ得べし。他なし、意識内にあるものと、現實との關係といふを是れなり

さて、以上諸困難のあるにも拘らず、美といふとには、一の特性あるもの丶如く、而して此の眞理は、別に多くの議論を用ゆるに及ばずして之を知り得べし。即ち美てふ意識は、常に必ず評價的判斷なりといふを是れなり。美といふ觀念のある所には、常に必ず之に伴ひて尊重、感佩等の觀念のあらざるとなし。

さすれば、美の判斷も亦道德的判斷や、論理的判斷と同彙

類の中にありといふべし。蓋し三者とも一種の理想を認めて、之を具体的の經驗と比較し、而して之より生ずる評價は、或は道德的判斷となり、或は道理の判斷となり、或は趣味の判斷となるものなればなり。

『美と善と知識とは、姉妹の間柄なり、
三者互ひに戀ひ慕ひ、且つ人の友たり、
三者同一の屋内に住ひ、
涙なしには相別離する能はず』

純美的の理想なるものは、之を公式に顯し得べきものにあらず。然れども、該理想が一種の常恒的、一般的の要素を有するものなるは、動かすべからざるの證據あり。見よ、自然界に於ても、美術界に於ても、一般に美の或る形式に感動することは、能く人の知る所にして、是れ即ち趣味に、一般的の一致あることを示すものにあらずや。成程趣味に無限の種類

あることは之を許さゞるべからず。而も此の渾沌紛然たる中間に、一箇の公認せられ居る理想あり。美術に於ては我等之れを『クラシック』といふ。瑣末の點は兎も角、その大略に於ては、此の理想を認めざるものは、是れあらざるなり。

此の理想は單に之を一種の心的現象と認め得られざるにあらず。即ち一は境遇より來り、又一は、批評先づ習慣を作り、習慣遂に一般的の趣味を養成せし結果なるかも知るべからず。然れども、自然界には絕對美の顯現ありて、その一般を感動せしむる點より見れば、如上の理想の背後に、形而上的の基礎ありともいふを得べし。此點に關して、一の注意すべきことは、美術上の美よりも、自然界の美に關して一層堅實の一致ありといふこと是なり。こゝに起るべき一難問は、倫理學の領域内に於て起るものと相同じ。即ち此の理想と、之に含める規則とには絕對的

價値ありや抑も亦單に比較的價値のみなりやといふこと是れなり。

尙ほ審美學上、此の外に一般哲學上の問題に關係ある面白き問題あり。他なし、審美的の判斷なるものは、之を知識的の判斷若しくは道德的の判斷に比すれば、自然界の消息を漏すこと一層眞實に一層深遂なりや否やといふこと是れなり。　蓋し審美感の銳敏となるや、神秘的に萬有中に寓在する靈氣を意識することあるもの丶如し。　殊に詩人にありては、興趣の湧き起ると共に、幻象を望み、夢を夢み、萬有の秘に通じ、大不可知界を蔽ふの幔を撤するに至ることあり。　カントは、純理の判斷及び實理の判斷に關する諸難問を、審美的判斷にて、解決せり。　蓋し純理の判斷なるものは、純粹に知力的起源のものにて、又實理の判斷なるものは、意思の法則となるべき幾多の道德的眞理を指すものなりとはいへ、經驗的現象の背後に存する現實は、知力を以てするも將た意思を以てするも、

到底之を知り得べきものにあらざればなり。　此故にカントはいふ、知覺界の實性なるものは、一面には現實と他の一面には、美を解し得べき靈魂との間に通ずる同情心によるにあらざれば、到底之を了解するを得ず。　隨つて、我等の審美的判斷なるものは、一種一般的の分子を有す。蓋し審美的判斷とは、自然界に於ける一般理を認むるの謂なればなりと。　マシウ、アルノルドが『物の美を見るといふは、即ちその眞理を見るの謂なり』と言ひしと、その意相同じ。

上說、美に感動すといふことは、自然界の結局即ち目的を認識すといふことと、密接の關係あり。　自然界の目的を認識すとは他なし、世界の秩序と調和とを直覺することなり、即ち之を美なりとして直覺する而已ならず、又深遠の經綸、偉大の意匠を顯すものとして直覺することなり。　此の故に、審美感なるものは、萬代を通じて一貫する目的を疑惑せざる詩人的

預言者的の見識を有するものと知るべし。凡そ理想の存在と其の意味とを感知するほどの心は單に此の理想の價値を認むるにのみ止まらざるものなり。即ち斯くの如き心は宇宙創造者の心に通じて、自らも亦創造者となり、種々なる美術を以て、その夢幻に髣髴せしものを發表するを常とす。されば カント は天才に定義を下し、自然界同様の働きをなす知力なりといへり。又 シェルリング は、大絶對者自ら美術家の作品を借りて、自然界の秘と、現實の眞性とを示し、以て己れを發表すといへり。されば、現象の皮相を見るのみならずして其神髓に徹底し、美と目的との存する如く、道理の精神存することをも悟るといふは、全く審美的の見識に由ることなりとす。而して如上の主意は近代の唯心論者中、或る優勢なる一派の説なると共に、古く且つ名譽ある系統を引ける説なりとす。即ち遠く之を古代のギリシャの思想の中に、其の起源

を求むるを得べし。プラトンは即ち此說を懷抱したりし人なり。プラトンの流れを汲みて、凡ての美は外殼を漏れ出づる內心の光となせしプロチナスの書中にも、亦此の主意顯れたり。

此點に關して、空しく看過すべからざるは、ヘーゲルの美術論是れなり。ヘーゲルは美術を以て、物質に對する心の勝利と認む。是れ美術は『心中にある現實』を現象の上に印象する者なるを以てなり。斯くの如くにして活ける觀念は、化して有形的のものとなるとはいへ、凡ての美術皆悉く完全に、觀念を代表するものと思ふべからず。先づ建築に就て言はんに、之れには心と物質との二元ありて存す。是れ物質は未だ充分に觀念を代表するに至らず、寧ろ觀念のための記號たるが故なり。次に彫刻に於ては、觀念は物質を媒介として、一層適切に代表せられたり。但し之を繪畫に比すれば、此點に於て一步を遜る所あり。是れ蓋

し彫刻の眼は冷硬無氣力なるに、繪畫に於ては、思想の精神之に輝けばなり。音樂は繪畫よりも一層主觀的のものなれば、內部的動作、內部的感情を顯すと更に適切なり。但し詩に至りては、是れ美術中の美術なり。何となれば、觀念は遺憾なく言によりて言ひ顯され、而して思想の媒介たる物質は、間然する所なく觀念の從屬たるが故なり。之に加ふるに、詩にありては、形式と思想と相融合し、斯くて唯心的に主觀と客觀との調和を現實ならしむればなり。さて以上約說したるヘーグルの說に就て見るに、觀念には創造力なるものありて存し、元來無形空漠のものを媒介として、思想の美を生出するものなるは明かなり。

またロッエは、審美的概念を以て、知識學上の諸難問を解釋し得るものとなせり。即ちいふ、現實は三の方法に於て外に現はる。第一は、種々なる現實が、皆必ず遵據せざるべからざるの通則としてなり。第二は

事物の實体たる本質及び勢力としてなり。第三はまた、現實の諸分子をして、相合同して、特別の一目的、特別の一觀念を實現せしむべきの計畫としてなり。尙ほロッエの論點とする所は他なし、以上擧ぐる所の現實の三要點は、何等かの相一致する點あるとは、理性も良心も共に之を認むる能はざる所なり。然れども美を認識するの力は即ち斯くの如き一致の存在を認む。勿論不明糢糊の中に之を認むるに止まれども、亦充分なりといふを妨げずといふにあり。さればロッエが美の定義にいふ、「我等の認識力が到底一致ならしむるを得ざる三力(即ち法則と物質と觀念と)の中に、一致あることを直覺せしむる所の現象を美といふ」と。

此他、審美學に、一般哲學上に關係ある一問題あり即ち審美學の倫理學に對する關係是れなり。或る種の學者の間には、善と美とを同視する

の傾向ありて、シャッフベリー及びハッチソンの倫理說は即ち之が代表者なり。こは右の兩家が、善惡の辨別力の起源を尋ね、審美感に密接の關係ある道德感に歸することよりして之を知るを得べし。曰く惡行は、不完全、不健全の趣味より出で、正行は善良の趣味より出づと。シルレルは半ば詩人的、半ば哲學者的の見識を用ゐ、審美的の理想が、倫理的概念と行爲との進步に及ぼすべき影響を力說せり。即ち論ずらく、人は美と相接觸するに由りて自ら其の高尚の氣品に薰染し、惡に誘惑せらるゝこと少きに至り、斯くして意思と願望とは相調和せらるゝなりと。ショッペンハウエルは、惡の本質を以て不撿束なる意思の中にありとせし人なるが、意思の熱を鎭靜し、愼重の態度に立ち還らしむることは、美を直覺することにありとなせり。シルレルの說によれば、理想とは『ショーネ、ゼーレ』即ち美なる靈魂なり。美なる靈魂とは他なし、義務の命令

と、好尙の催進との間に何等の衝突もあることなく、却て旺盛なる元氣と溢るゝばかりの精神とが、惡の境域内に於てよりは寧ろ善の境域内に於て、滿足を得るものゝ謂なり。ヲルヅヲルスは、その『義務の歌』の中に、此の觀念を言顯せり、曰く、

『我等の日は朗かに且つ明かなるべく、
我等の性質は多福ならん、
愛にして若し我等を導く光となり、
喜にして若しその保證たらば』

と。是れカントの峻酷なる嚴格主義と相反するものといふべし。蓋しカントは道德の本質を以て、內部の爭鬪に存すとなせばなり。我等の性質に於ける高等のものと劣等のものとの激戰に存すとなせばなり。而して如何に抵抗の少き方針に沿ひて道德を建設せんとするに

熱心なる人にもせよ、全くカントの此考へを看過し去るべきにあらず蓋し精神の自由なるものは情念の爭鬪に由りて得らるゝこと往々是れあればなり。さはいへ、審美的の衝動は善に向はしむてふ説は、決して倫理的經驗の全部を説き盡すものにあらずといへども、亦甚だ暗示多き説なり。且つ又此説の起源を古代に求むるとも、多少の益なしとせず。プラトン極めて有力の語を用ゐていふ、

『果して然らば、正語といひ、調和、形式、韻律の正を得るといひ、何れも皆性質を善に導びくを助くるにあらざるなし。所謂る性質の善といふは、實は遲鈍の謂なる通俗の意義に於て言ふにあらず。道德的の習慣に關しては、眞に整然として秩序ある心術をいふ』

彼曰く『眞に然り』

『果して然らば、凡そ事を爲さんとするの青年、その何處にあるを問は

ず、何れも是等の諸德を求むべきに非ざるか』

『然り之を求めざるべからず』

『余は思ふ、繪畫の如きは、是等の諸德を以て(即ち一部は倫理的に、一部は審美的なる諸德をいふ)充溢せり。その他この類の手工また然り。織物の如き、彫刻の如き、建築の如き、その他日常の器具の製作是れなり。加之、我等の肉体の性質と、諸生物の性質も亦然り。蓋し是等凡てのものに於ては、正しき形か若しくは正しからざる形が固有せらるればなり。而して正しからざる形、韻律の缺乏、調和の缺乏等が、由れる心と性質とに對する關係、恰かも兄弟の如きものあり。また之に反したる諸德は、之に反したる事情即ち溫和善良と兄弟の關係あり。然り、兄弟の關係あり、而して又その根本なりと謂ふべし』

彼曰く『然り、全く然り』

『果して然らば、獨り詩人だけが嚴重の支配を受け、善の肖像をその詩に作り込むべく、我等平凡者の中には何等の影響もなきものなるや。抑も亦、他の美術家も此の過失、放恣、賤陋、無氣力を、或は活物の形にも或は家屋の建築にも、或は他の工藝品にも、作り込むことを抑制せられ居るものなるや。或は又之をなすに堪へざる人には、斷然その美術品を製作することを差止め、以て社會に毒を流すことを預防すべきか。寧ろ我等は、その天才能く美の性質を發揮し。その藝術能く青年を善に薫化し得る人を求むべきにあらざる乎』。

以上余の引用せしところのものは、ギリシャ古代の道德たる『カロカガシャ』を(καλοκαγαθία)能く說明するものなり。『カロカガシャ』とは他なし、善に向はしむる審美的衝動をいふ。さて茲に擧げしプラトンの說の主意は、ギリシャに於ては、哲學に於ても、將た詩に於ても多く之を見

得るものなるが、此の觀念は特に能く詩人の心に投ずるものなりとす。蓋し美よりして善に移り、以て品性の發達するといふことには、一種神秘なる不可思議の要素ありて存するを以てなり。シエレーの『知的の美を謳ふの歌』は、極めて能く古へのプラトン的觀念を反映せるものなり、曰く、

『美の靈よ、
獨り汝の光のみが、山上の霧の如く、
夜風に吹かれて、琴の絃より鳴出づる
音樂の如く、
深更の江流に浮ぶ月光の如く、
人生の不安なる夢に恩寵と眞理とを與ふ。

* * * * *

されば恰かも自然界の眞理の如く、
若き我が上に降りつる、
汝の權能をして我が前途に、
平和を供せしめよ。 汝を崇拜するものに、
亦汝を保有するほどの凡ての物に、
美なる靈よ、汝の魔術もて、
汝を恐れ、又凡ての人類を愛する樣平和を供せよ。』

然れどもこゝに一事の注意せざるべからざるものあり。 他なし、善と美とは、互ひに密接の關係を有するものに相違なし、とはいへ、倫理的概念の意義は悉く審美的概念より出づとなすに至りては、是れ倫理的概念を超ゆるものなりといふを是れなり。

尙ほ倫理的概念と、審美的概念との間に密接の關係あるとは、兩者の間

に共有の特性あるとを見て之を知るを得べし。 即ち兩者とも、異なりと雖も亦相似たる方法にて宇宙の大靈を反映するを是れなり。 エマルソンの言へるが如し、曰く、『眞と善と美とは、一大靈の別方面のみ』と、此のエマルソンの觀念は、必ずしも凡神的の意義に於て之を解釋するを要せず。 却て有神論者の特に首肯する所なり。 神は、美の形の中に、全部ならずと雖も、亦幾分か顯はれ居るものなり。 昔の希伯來人が聖てふ美の中に神を禮拜せし觀念も、ダンテの天福觀も、プラトンが永遠國に於ける美も、グーテが自然界を活ける神の衣服と呼びしとも、一として此の觀念を含まざるはあらざるなり。

哲學の諸問題 了

明治三十九年十月四日印刷
明治三十九年十月七日發行

（定價三拾錢）

版權所有

著者　ゼー、ジー、ヒツペン

譯者　田中達

發行者　東京市京橋區銀座四丁目一番地　堀田達治

印刷者　東京市京橋區銀座四丁目一番地　ゼー、エル、カウエン

發行所　東京市京橋區銀座四丁目一番地　教文館

印刷所　東京市京橋區銀座四丁目一番地　教文館印刷所

30
486

1八

30
486

30
486

008011-000-0

30-486
哲学の諸問題
ゼー・ジー・ヒッベン／著

M39
AAA-0243